



藏本 誠三

三井不動産
顧問



昭和54年から6年間、博多で勤務した。入社後の配属先であった人事部からの異動で、マンションの開発に携わった。初めての開発事業、初めての転勤で、最初はいろいろと戸惑うことも多かった。

3年がたち、仕事にも博多にも馴染^{なじ}んできたころ、ご縁があり山笠に参加した。

写真は当時の支店の若手4人と、「流^{ながれ}昇^{あが}き」(その年町内で初めて山を動かす、本番の予行演習)に参加したときのものである。締め込み、水法被、鉢巻きに地下足袋という、山笠の正装での記念写真だ(右端が私)。私を除く3人は、一度の経験でよいと言ひ、本番の7月15日早朝の「追い山」に参加したのは私だけであった。

博多祇園山笠



幸運なことに、その年は中洲流^{なかすながれ}が一番山(最初にスタートをする山)で、午前2時に町会の詰所に集合、清めの杯を一杯だけ飲んで、隊列を揃えて「エイサア、エイサア」の掛け声をかけながら櫛田神社に参拝、満を持して、スタートを待つ。

4時59分、太鼓の音を合図に気合とともに櫛田入り、一番山にだけ許される「祝い^{めでた}自出度」を歌う。歌い終わると、大歓声とともに山が再度動き出し、対馬小路のゴール目指してひた走る。今も「1分前」の声を聞いたときの武者震い、太鼓が鳴った瞬間の興奮を思い出す。

こうして立派な「山のぼせ」(山笠に夢中な男のこと)になった私はそれから3年連続で山を昇^あがした。

往時茫々、あれから30年以上がたつ。来年あたり、また山笠に行ってみるか(もちろん昇き手ではなく、観客として)と考えている。